

【絵画】

1. 紙本著色三十六歌仙切〈(是則) / 佐竹家伝来〉 一幅

重要文化財（昭和10年4月30日指定）

法量 縦33.9cm 横59.1cm

時代 鎌倉時代

三十六歌仙の一人、坂上^{さかのうえの}是則^{これのり}（?～930）の姿を似絵^{にせえ}の様式で描くもの。もとは佐竹家に伝来した絵巻二巻であったが、大正八年に紙継ぎが外され諸家分蔵となった、いわゆる佐竹本三十六歌仙絵の一幅。図は右側に是則の官位・姓名と略伝を記し、『古今和歌集』所収の詠歌一首を二行に書き付ける（「みよしののやまのしら雪つもるらし、ふるさとさむくなりまさるなり」）。画面左側には烏帽子に狩衣・指貫^{さしぬき}を着した姿で坐る像主が描かれる。古来、画は似絵を得意とした藤原信実^{ふじわらののぶざね}、詞は後京極流の九条良経^{ごきょうごくりゆう}（1169～1206）筆と伝承されている。鎌倉前期を代表する歌仙絵の中でも保存状態の良好な一本である。



2. 紙本著色 源宗于像〈／(上畳本三十六歌仙切)〉 一幅

重要文化財（昭和32年2月29日指定）

法量 縦29.7cm 横48.9cm

時代 鎌倉時代

佐竹本と並んで鎌倉前期の歌仙絵を代表する、いわゆる上畳本三十六歌仙絵の一幅。各歌人が畳の上に坐ることから通称されるが、各像主の図様は佐竹本と概ね共通する。本図は冠をかぶり笏を執る黒袍の束帯姿の源宗于（?～940）で、画面右側に像主の官位・氏名と略伝を記し、『古今和歌集』所収の詠歌を二行に書く（「ときはなるまつのみどりもはるくれば、いまひとしほのいろまさりけり」）。もとは卷子装であったと思われるが、江戸時代には既に断簡となり、現在は十六点が国内外に分蔵される（重文指定は七件）。『考古画譜』では画は似絵の名手藤原信実、詞は藤原為家（1198～1275）とされるが、確証はない。しかし、鎌倉時代における似絵の優品として極めて貴重である。



【彫刻】

3. 木造 } もんじゅぼさつきしぞう **文殊菩薩騎獅像** ふげんぼさつきぞうぞう **普賢菩薩騎象像**

二軀

重要文化財（明治39年9月6日指定）

法量 本躰像高56.0cm（文殊菩薩騎獅像）

本躰像高56.4cm（普賢菩薩騎象像）

時代 平安時代

奈良市林小路町にあった圓證寺（近年、生駒市に移転）の本尊、釈迦如来坐像（鎌倉時代、奈良県指定文化財）の両脇侍として伝来した騎象普賢・騎獅文殊の一对像であるが、両者は製作年代を異にし本来の一具ではない。普賢は榿材の一木造で肉身部漆箔、衣部彩色仕上になる。台座蓮肉まで共木で彫出し内刳しない構造や、厚みと張りのある躰軀、大振りで深く鋭い衣文などの作風に平安初期風が顕著で、9世紀末の製作とみられ、丈高の髻や腰布の巻き方、膝頭が台座よりせり出す形式に密教彫像と共通する特色をみせるのが注目される。合掌する普賢菩薩は『法華経』勧発品および『観普賢菩薩行法経』に説かれる法華持経者の前に現前する姿を表したもので、本像はその最古の遺品として貴重である。文殊は寄木造、漆箔仕上で、定朝様が繊細化した作風に院政期の特色を示し、右臂先が後補となる以外は持物を含め製作当初の姿をよくとどめ、当代の文殊菩薩像の優品と評価される。獣座はいずれも後補ながら、象は生彩のある造形に鎌倉前期の特徴をみせ、動物彫刻として見逃し難い。



木造普賢菩薩騎象像



木造文殊菩薩騎獅像

【工芸品】

4. 太刀 銘則重 一口

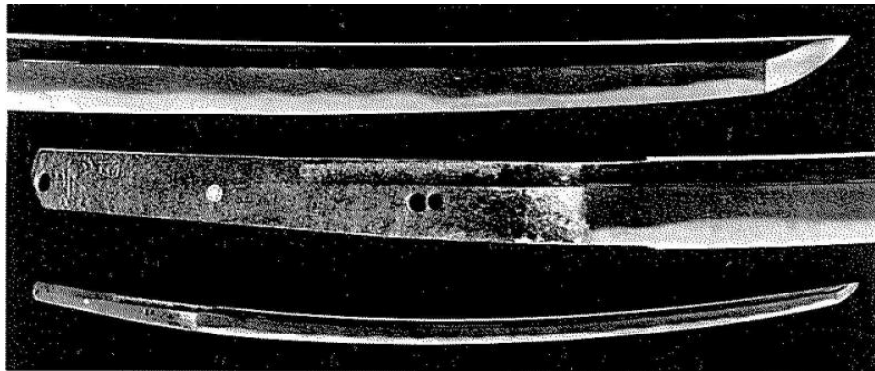
重要文化財（昭和12年5月25日指定）

法量 長71.3cm 反り2.3cm

時代 鎌倉時代

正宗十哲じかねの一人、あるいは正宗同門の新藤五国光門下じにえとされる越中国則重の作。則重は地鉄鍛えの名人といわれ、本作においても、地沸が厚く地景すりあげの頻りに入った鍛えなどに得意とするその作風がよく表われている。やや磨上げた茎はきおもての佩表に二字銘を切る。

鎌倉時代末期における則重の代表作であり、かつ太刀の有銘作は数が少なく、貴重である。



【書跡・典籍】

5. 医学書 (版本)

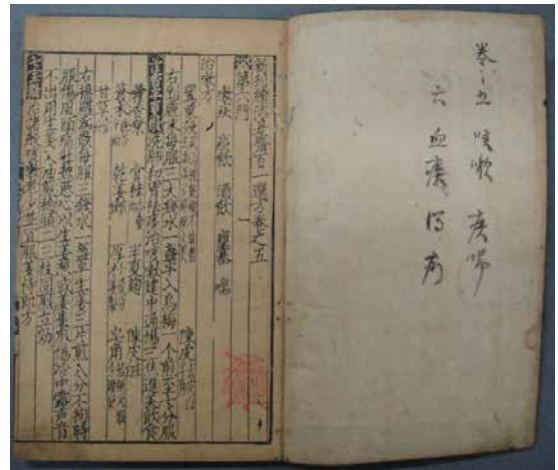
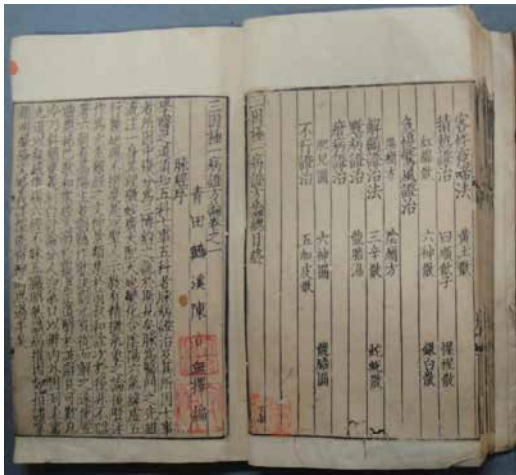
23件

時代 宋時代～清時代

典医であった京都の福井家に伝来した医学書のまとまりで、「崇蘭館本」として夙に知られている史料群である。

本史料群は、宋・元版をはじめとする版本からなる。なかには、天下の孤本というべき南宋版や、わが国にのみ伝存する稀覯本なども含まれている。

わが国における医学書受容のあり方、漢方・本草学などの東洋医学史、出版・印刷史、交流史などを研究するうえで、まとまって伝来した数少ない医学書の史料群として極めて重要であり、国内外において高く評価されている。



【考古資料】

6. 流水文銅鐸

一口

徳島県阿南市山口町末広出土

重要文化財（昭和37年2月2日指定）

法量 総高61.5cm，底長径33.0cm，底短径29.0cm

時代 弥生時代

青銅鑄造。遺存状態の良好な、完形の流水文銅鐸である。鰭の幅が狭く、鐸身は円筒状で、両側の鰭方向の反りは顕著ではないが、前後への反りが著しい。鈕は断面が菱形を呈し、鈕や鰭には飾り耳等がない。鐸身は二条の細い突線が横方向に4段と、縦方向の中央に1本鑄出し、六区画に分け、その各区画内には流水文を整然と描いている。

舞には鈕を挟んで方形の孔が2個あけられ、内面には裾に近い部分に断面半円形の内面突帯が一条めぐる。

総じて鑄あがりがよく、全面が緑錆に覆われているが文様は鮮明である。片側は風化がやや進んでいて、鈕の上部と鰭の一部を欠失するが、全形を損なうものではない。本件は、流水文銅鐸の数少ない遺例として重要であり、その学術的価値は高く評価される。



【工芸技術資料】

7. 無名異練上線紋鉢 一点



五代 伊藤 赤水 (伊藤 窯一) 作
(重要無形文化財「無名異焼」保持者)

平成 26 年 (2014 年)

工芸技術記録映画対象作品

径 40.8cm 高 13.8cm

無名異焼は、新潟県佐渡に伝わる伝統的な陶芸技法。佐渡の金銀山の金鉱脈から産する無名異土（酸化第二鉄を含む赤色粘土）を用いた、赤い肌を特徴とする陶器の制作技法である。

本作品は無名異焼によって制作された練上鉢。赤い無名異土と白い野坂土を配合した 2 1 種類の色調の粘土を素材とし、各色調の粘土を薄くスライスしたものを重ねて、それを三角形に切ってパーツを作る。各パーツを組み合わせて型枠に入れて器形を作り、焼成して仕上げる。

平成 2 5 年度工芸技術記録映画「無名異焼—五代伊藤赤水のわざ—」の対象作品。

8. 蒔絵八角箱「月華」 一点



おおかど ゆうじ
大角 裕二 作

平成 26 年 (2014 年)

第 61 回日本伝統工芸展

文部科学大臣賞受賞作品

縦 18.0 cm 横 18.0 cm 高 19.8 cm

被せ印籠蓋造の八角箱。全面黒漆塗り蠟色仕上げとし、蓋表には狐影が浮かぶ月を螺鈿で表し、蓋側面には薄を蒔絵及び螺鈿で表す。能登の里山の実景に基づく意匠。蓋表の螺鈿は、線状に裁断した鮑の貝片を並べて、裏面から黒漆で狐の影を描き、その周囲に銀消粉を蒔いてコントラストを付ける。蓋側面は各面に薄を銀蒔絵または螺鈿で交互に表す。黒漆乾漆粉で薄の文様を蒔いたのち、黒漆で覆って、粗密のある銀蒔絵粉を縞状に蒔き分けて、銀地にシルエット状に浮かび上がる薄を表す。螺鈿は鮑の裏面に銀消粉を蒔いてから割った細片を組んで薄を表す。

蒔絵と螺鈿の高度な技量が発揮された第 61 回日本伝統工芸展における優秀作品。

つむぎおりきもの ふゆ みずうみ
9. 紬織着物「冬の湖」 一点



しむら
志村 ふくみ 作
(重要無形文化財「つむぎおり紬織」保持者)
平成26年(2014年)
工芸技術記録映画対象作品
丈181.9cm 衿69.5cm

つむぎおりちゆうぶり ひな
10. 紬織中振「雛げし」 一点



しむら
志村 ふくみ 作
(重要無形文化財「つむぎおり紬織」保持者)
平成22年(2010年)
丈172.5cm 衿68.5cm

紬は、元来、屑繭くずまゆを真綿にして保管し、農家の副業として農閑期に織られる素朴な織物であった。近年は、染織作家により優れた風合の新鮮な紬が誕生し、芸術的・工芸的な面で飛躍的に発展した。

No. 9 は、冬期の琵琶湖を主題とする横段模様の着物。染料に藍・玉葱を用い、要所々々に絣染めやつなぎ糸の技法を駆使して、降雪する琵琶湖畔に繁る枯れた芦やエリ（小型定置網）を叙景的に表現する。平成26年度工芸技術記録映画「紬織—志村ふくみのわざり—」の対象作品。

No. 10 は、雛くさぎげしの花畑を主題とする格子模様の中振。染料に紅花・藍・刈安・梔子・紫根・臭木を用い、雛くさぎげしが咲き誇る情景を印象的に表現する。重要無形文化財「紬織」保持者による高度な技術が発揮された優秀作品。

11. ^{ばしやう ふ いしやう か}芭蕉布衣裳「^{ハチジョーハチ}変わり八十八」 一点



^{たいら としこ}平良 敏子 作

(重要無形文化財「^{ばしやう ふ}芭蕉布」保持者)

平成26年(2014年)

工芸技術記録映画対象作品

丈 153.5cm 裄 70.0cm

芭蕉布は、糸芭蕉の繊維を糸にして用い、織物を作る染織技法。その内容は幅広く、糸芭蕉の栽培、糸作り、緋結び、染色、製織、洗濯(仕上げ)に至る。芭蕉布の制作は、第二次世界大戦や生活様式の変化により衰微したが、戦後、大宜味村喜如嘉で復興し、新たな表現の可能性を追求する活発な制作活動が行われてきた。

本作品は^{りゅうそう}琉装仕立ての衣裳で、緯緋の文様の一部を藍と褐色の色違いとし、片身替に仕立てている。文様は、伝統的な緋文様であるハチジョーハチ(八十八)に工夫を加えた「変わり八十八」。分解すると八・十・八となる「米」という漢字を図案化した吉祥文様。

平成26年度工芸技術記録映画「芭蕉布—平良敏子のわざ—」の対象作品。

12. 蒔醬合子「嵐のち晴」 一点



磯井 正美 作

(重要無形文化財「蒔醬」保持者)

平成 25 年 (2013 年)

径 25.4cm 高 12.3cm

蒔醬は、線刻、点刻等をした窪みに色漆を充填し、研ぎ出して模様を表現する技法。

本作品は、円形の深い印籠蓋造の器で懸子が付属する。合板を貼り重ねて削り出す積層技法によって造形し、布着せ、漆下地（本堅地）を施し、黒漆の中塗を約 10 回塗り重ね、上塗りする。加飾（装飾）技法は蒔醬で、側面の下方には、黒漆地を残して山並みのシルエットを表す。蓋甲面及び側面には往復彫り（大きめと点彫りを連ねる技法）を施し濃青色の漆で色詰めした空に二つの虹の輪を表す。

第二次世界大戦の終戦を迎えた時に感じた平和の喜びと杜甫の詩「春望」（國破山河在・・・）の意を、自宅近くの風景に重ねて表現した。

重要無形文化財「蒔醬」保持者による高度な技術が発揮された優秀作品。